

2024年9月3日

世界の人びとのための JICA 基金活用事業
終了時活動報告書（2023 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	来日直後の日本語がおぼつかない在日ネパール人児童に対する効果的な学習支援体制構築プロジェクト
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人 SEWA
(3) 実施期間	2023 年 10 月～2024 年 9 月
(4) 実施国	日本
(5) 活動地域	全国
(6) 活動概要	
①活動の背景：	
日本に長期滞在する在日ネパール人は、2012 年の 24,071 人から 2021 年は 97,109 名と 4.0 倍に増加した（在留外国人統計：法務省）。同期間における在日外国人総数の伸び率は 1.4 倍であることを踏まえると、ネパール人は近年、急激に増加していることが分かる。日本各地の「カレーレストラン」で数多くネパール人コックが働いている他、コンビニエンスストアや居酒屋などのサービス産業でネパール人が働いているのを見かけるのも珍しくなくなった。 在日ネパール人は在留資格別に見ると「家族滞在」ビザでの滞在がおよそ 3 割を占め、最も多いという特徴がある。これに伴い、学齢期（6 歳～15 歳）のネパール人児童数は 2012 年の 991 名から 2021 年には 3,274 名に達した。ネパールの「家族滞在」ビザの取得者では、まず父親が（技能ビザで）来日しカレーレストランでコックとして働き、その後、母親と子どもを（家族滞在ビザで）呼び寄せるケースが一般的である。子どもは来日の前後に日本語のトレーニングを受けることなく、居住地域の公立小学校に通学することが多い。この為、学校の授業についてゆくことができないネパール人児童も多く、学校教員も対応に苦慮している。 地方自治体の多くは、このような外国人児童のために「支援員」制度を設けている。この支援員制度では、英語や在日外国人児童の母国語が出来る支援員が外国人児童の学校におもむき、一定時間数の日本語支援に従事する。具体的には「取り出し授業（外国人児童が別室で日本語支援を受ける）」や「入り込み授業（支援員が授業を行っている教室に入り外国人児童の隣に座って支援を行う）」などの方式で支援を行う。一方、支援員が学校を訪問する回数や期間、支援方法は自治体により異なる。各自治体がそれぞれ支援員を募集しており、希望者	

は登録をすると必要に応じて自治体から声がかかる仕組みとなっている。しかし、このような支援員に対する支援を行われておらず、支援員は徒手空拳で対応しているのが実情だ。

②活動の目標：

このような状況を踏まえ、本プロジェクトの目的は、在日ネパール人児童向け副教材の作成・活用および支援員に対する支援を通じて、来日直後で日本語ができない在日ネパール人児童の小学校の授業における学習を支援することを目的としている。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容*

本プロジェクトでは以下の活動を実施した。

①小3から小5までの副教材（算数）の作成

【目的】

小学校で算数が難しくなる3年生から5年生までの副教材を整備することにより、在日ネパール人児童の言語バリアによる障壁の軽減を図る。

【活動内容】

(1)教科書の購入（2023年10月）

副教材は小学校の教室で、教科書や授業と共に活用することを想定している。また、この副教材は教科書に基づいて作成することから、採択率の高い「東京書籍」と「啓林館」の2社の教科書を底本とすることとした。

（*例えば以下のサイトによれば、小学校算数の教科書で採択率が一番高いのは「東京書籍」であり、二番目が「啓林館」である。一般的に東日本では東京書籍が強く、西日本では啓林館の採択率が高いと言われている。）

■令和3年度小学校教科書 採択ベスト3

<https://kaede-pro.com/blog/2023/02/10/post-421/>

(2)日本語用語の抽出（2023年11月）

「学習用語」および「文章を理解するための用語」に分けて抽出を行った。また“グループの平均”といったように、“グループ”や“平均”といった単語単位で抽出するよりかは、意味のまとまりに沿って抽出した方がネパール人児童が理解しやすいと思われる言葉については、文節や意味のまとまりで抽出を行った。

(3)ネパール語への翻訳（2023年12月～2024年1月）

プロジェクトメンバーの知り合いのネパール人の合計9名に翻訳およびチェック作業を依頼した。翻訳者やチェッカーの選定にあたっては、日本語能力を勘案した。日本語能力試験の2級合格者の5名、3級合格者の4名に対し翻訳作業を依頼した。

(* 一般的に日本企業の正社員で採用されるには 2 級程度の語学力が必要とされている)

Grade	Publisher	TRANSLATER			CHECKER		
3	Tokyo Shoseki	BHANDARI YOGENDRA	バンダリ ヨゲンドラ	N2	MALAKAR SULOCHANA	マラカル スロチャナ	N2
3	Keirin kan	MALAKAR SULOCHANA	マラカル スロチャナ	N2	BHANDARI YOGENDRA	バンダリ ヨゲンドラ	N2
4	Tokyo Shoseki	BHATTARAI RIJAN	バタライ リザン	N2	SHRESTHA PRABIN	スレスタ バルビン	N2
4	Keirin kan	SHRESTHA PRABIN	スレスタ バルビン	N2	BHAATA KRISHNA RAJ	バッタ クリスマ ラズ	N2
5	Tokyo Shoseki	KHADKA SUBASH	カドカ スバシュ	N3	GIRI BIPIOV	ギリ ビブラブ	N3
		NYAUPANE BHUWAN	ネウパネ ブワン	N3	THARU BISWASH	タル ビシュワッシュ	N3
5	Keirin kan	BHAATA KRISHNA RAJ	バッタ クリスマ ラズ	N2	SHRESTHA PRABIN	スレスタ バルビン	N2

(4) 翻訳のチェック (2024 年 2 月)

翻訳をした人が、同じ学年の別の教科書のチェックをすることで、より適切なチェックができると考えた。この為、事情が許す限り、同じ学年同士の翻訳者をペアにしてチェック業務を行う体制とした。また、翻訳作業が終わったファイルを、日本語抽出者も確認し、(わかる範囲で) 翻訳が適切ではない箇所を指摘する作業も行った。

(5) 製本

一定の予算内で最も多くの冊数を作成できるように、製本する冊数を検討し、その結果、以下の部数の製本版を作成した。

	東京書籍	啓林館
小 3	200 部	200 部
小 4	200 部	200 部
小 5	200 部	200 部

(6) 配布

製本した副教材や PDF による副教材を、メンバーで手分けして配布を行った。主な配布先は以下の通りである。本プロジェクトでは日本各地からメンバーが参画しており、副教材の配布先も関東地方のみならず、関西地方、九州地方まで含み広範囲に及んでいる。また、JICA 横浜および JICA 九州では図書館に所蔵頂いた。

< 配布先 (一例) >

【公的機関】

多文化活動連絡協議会 (神奈川県)、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ (神奈川県)
和歌山県国際交流センター (和歌山県)、京都府国際センター (京都府)、城陽市国際交流協会 (京都府)、精華町立図書館 (京都府)、国立国会図書館関西館 (京都府)、JICA 横浜 (神奈川県)、JICA 九州 (福岡県)

【教育機関】

荒川区立尾久宮前小学校 (東京都)、西中原中学校 (神奈川県)、日吉小学校 (神奈川県)、嶺町小学校 (東京都)、京都西山短期大学 (京都府)、鳥羽高校定時制課程 (京都府)

【外国人コミュニティ、NPO 法人など】

在外ネパール人協会九州支部 (福岡県)、ベトナムフェスティバル福岡実行委員会 (福岡県)

②セミナー開催による支援員の能力強化

【目的】

支援員向けのオンライン・セミナーを開催にすることにより、副教材を周知するとともに活用方法をひろく宣伝する。また、支援員の日本語教授法や学習支援の能力が向上される。

【活動内容】

本プロジェクトでは、以下の日程に合計3回のオンラインセミナーを開催した。

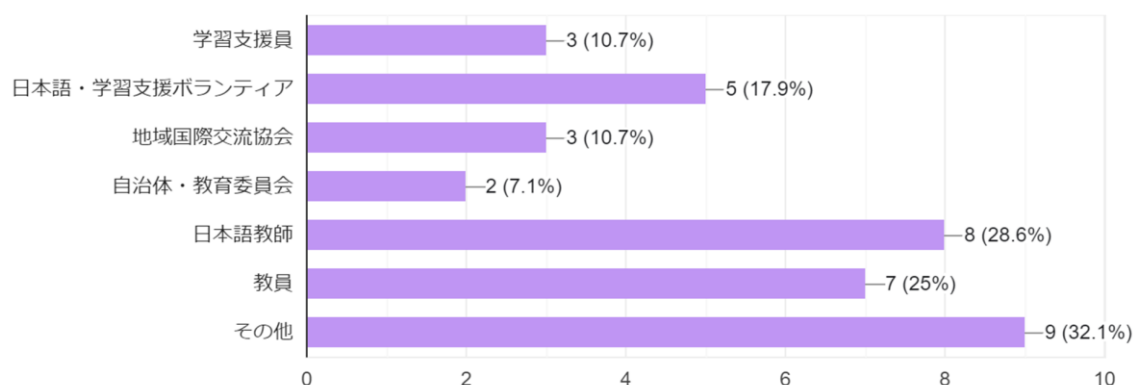
	開催日時	申し込み者数
第1回	2024年4月27日（土）午後7時～午後8時30分	63名
第2回	2024年6月29日（土）午後4時～午後5時30分	51名
第3回	2024年8月31日（土）午後7時～午後8時30分	54名

（1）第1回オンラインセミナー

第1回目のセミナーは、ネパール人児童に対する日本語支援に焦点を当てて行った。支援員に従事するプロジェクトメンバーより日本語支援における課題（関心興味の喚起や持続など）の他、日本語教師のプロジェクトメンバーより日本語支援における注意点（絵やイラストを使うことや有用な学習アプリの紹介）に焦点をあてた。

また、副教材の具体的な使用方法について、支援員に従事するプロジェクトメンバーの経験をもとに説明をした。

尚、第1回目のセミナーでは、日本語教師（8名）からの申し込みが最も多かった。



（2）第2回オンラインセミナー

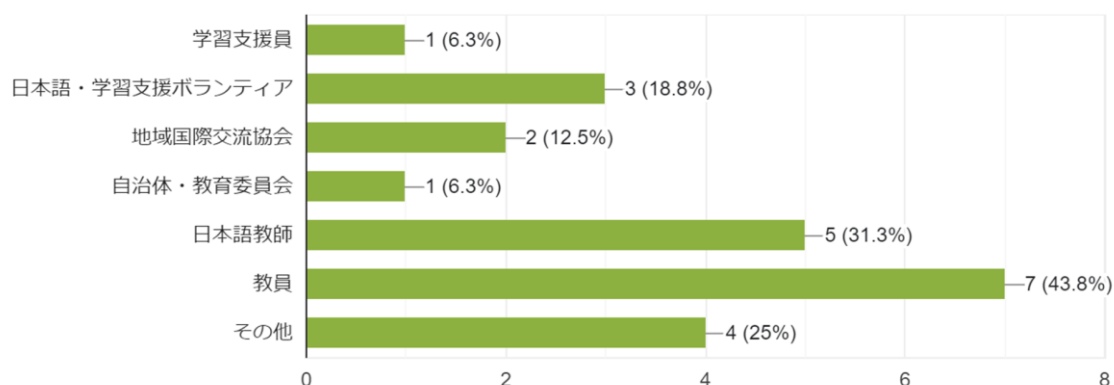
第2回目のセミナーでは、「ネパールの教育事情」に焦点をあてた。これは、第1回目のセミナーにおける終了時アンケートで「次回以降のセミナーで取り上げて欲しいテーマ」という設問を設けたところ、「ネパールでの学校ではどのような授業をしているのか」「宿題はあるのか」「給食はどのような感じなのか」などネパールの事情に関する質問が数多く寄せられたためである。

東京在住のネパール人親子にインタビューをする形でネパールにおける学校と日本の学校の違いについて話をしてもらった。また、青年海外協力隊で理数科教師として活動をしたメン

バーから、ネパールの教育事情について写真なども交えて詳しく話をした。

この他、副教材の配布に伴い、様々な学校における使用時の様子や教員などの「声」を紹介した。

第2回セミナーでは、第1回セミナーとは異なり教員（7名）からの申し込みが最も多かった。

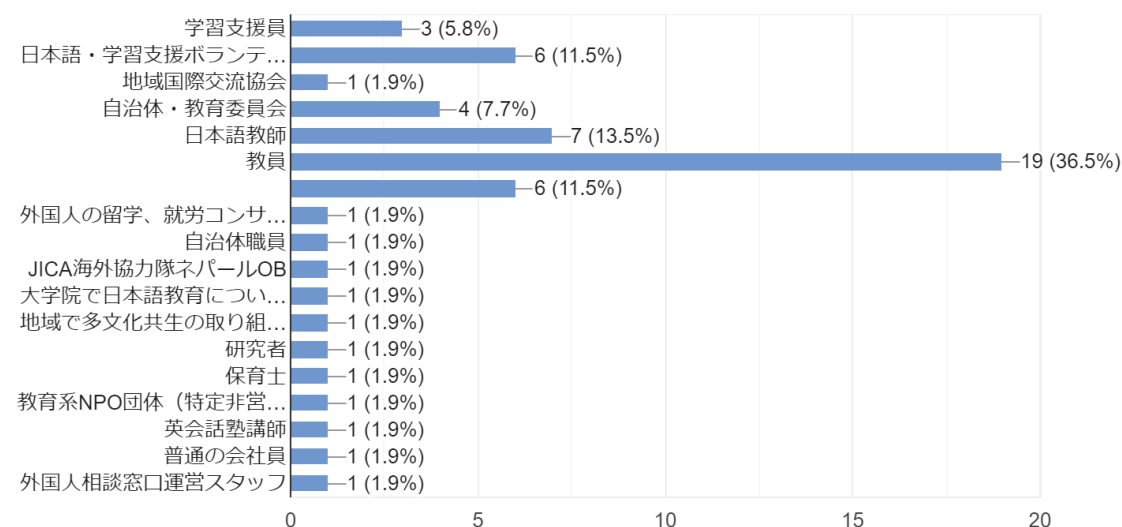


（3）第3回オンラインセミナー

第3回目のセミナーでは、「ネパール人生徒の高校進学」と「教室で使える簡単なネパール語」に焦点をあてた。これは共に第2回セミナーにおける終了時アンケートにおいて寄せられた希望であった。「ネパール人生徒の高校進学」では京都府でネパール人生徒が多数通う鳥羽高校定時制課程の大町久美子先生に、「教室で使える簡単なネパール語」では青年海外協力隊で長年、派遣前訓練でネパール語を教えていたディベンドラ・サヤミ先生にご登壇頂いた。この中で、「あいさつ」や「ありがとう」「よくできた」など学校の教室ですぐに使える簡単なネパール語講座を行った。

また、副教材では翻訳者へのインタビューから得られた知見を基に、「日本語とネパール語における学習言語の違い」について紹介を行った。

第3回のセミナーにおいても教員（19名）からの申し込みが最も多く、その数も第2回セミナー時よりも2倍以上に増えた。



今般のセミナーでは当初、支援員（学習支援員）を対象に考えていた。これは、支援員はネパール人児童の日本語支援や教科学習の支援を担っており、問題意識も高いと想定したためだ。しかし、実際にセミナーを実施してみると、「教員」からの申込数が多く、またその数も回を追うごとに増えていった。このことから、今般の一連のセミナーでは、支援員のみならず学校の教員もネパール人児童への学習支援に対し問題意識を有している人が多く、セミナーが一定の訴求力を有していたことが分かった。

（２）実施成果：

①小３から小５までの副教材（算数）の作成

副教材における成果は以下の４点である。

まず１点目は、スケジュール通りに合計１,２００部の副教材（製本版）を作成したことである。副教材の作成過程では、「どの教科書会社を底本とするのか」や「子どもに分かりやすいワードは何か」など、プロジェクトメンバーの中で侃々諤々の議論があった。それらの経過を経て、ネパール人の子ども達が使いやすい副教材が「練り上げられた」という実感を抱いている。

２点目は、合計３１の機関や個人に対し副教材が配布されたことである。上述のような公的機関や教育機関のみならず、日本語教師や学校教員の個人、あるいはプロジェクトメンバーの知り合いのネパール人にいたるまで、様々な地域の様々な人々に副教材を届けることができたことは、本プロジェクトにおける大きな成果だと感じている。

本プロジェクト期間における配布数

	東京書籍	啓林館
小３	７０部	７０部
小４	１１０部	７０部
小５	７５部	８５部

（*配布先のニーズ（ネパール人児童数や学年）を応じて配布を行ったことから、上表のように学年や教科書会社により配布数は異なる）

３点目は、副教材に対する「声」に接することができたことである。副教材の配布時に以下のような「声」に接することができた。

【配った際の声】

- １、他の日本語支援者や団体にも紹介したいと思います。
- ２、小学校高学年や中学生でも低学年の算数用語から伝えていく必要があるので助かります。
- ３、ネパール語だけでなく英語もあるのでフィリピンから来た児童にも使えます。
- ４、知らない語句があったときに辞書として便利だと感じました。
- ５、英語の表記があつてとても便利で活用しました。
- ６、新宿区・杉並区の知り合いの教員や支援員に見せて SEWA のサイトを紹介します。
- ７、日本語支援をしているネパール人にも紹介します。

4 点目は副教材の使用例を集めることができたことである。本プロジェクトの実施期間中に以下のような事例に接した。以下にあるように、①ネパール語のみならず英語で理解した方が分かりやすいネパール人児童がいること、②中学生などが「復習」や「理解度チェック」のために（小学生を対象とした）副教材を使用していることなどが確認された。

【事例① 小学校低学年（来日間もない児童）（支援員）】

国際教室の先生や担任の先生から、算数ドリルを一緒に進めてほしいと頼まれることがあった。（「左から何番目」「増えると」「なくなると」「全部で」「かける」「わる」等の言葉の意味がわからない）

➡副教材の用語（ネパール語、英語）を見ながら説明した。算数用語や語句を1つずつ理解できるように、繰り返し練習した結果、授業に参加できるようになった。

【事例② 小学校高学年（来日間もない児童）（支援員）】

日本語が十分でない児童で、時間がある時に計算や図形のチェックをした。その際、副教材でネパール語や英語を一つ一つ確認しながら進めた。

➡算数は英語で習ったようで副教材の英語を使用。知っている用語は声を出して読んでいた。

【使用事例③ 小学校低学年（来日5か月くらい）（教員）】

学習用語はまだ難しい為、授業中に副教材を併用した。その際に、大事な単語を指さししながら示した。

➡指差ししたことで、どこをやっているかが分かり、意味も、英語やネパール語で見た方が理解できている様子が見られた。

【事例④ 中学生（来日して間もない生徒）（支援員）】

今回の副教材の内容は、算数用語であって中学校の数学用語ではありませんが、基本の用語は同じなので、四則計算や図形のチェック後に理解していなかった部分を、副教材の算数用語で教えた。算数・数学が得意な生徒には、副教材を辞書のように使用できる事を伝えたいと渡した。

➡分数計算ができなかったため、倍数、約数、通分、約分など、必要な言葉の意味を、副教材で確認すると理解していた。

この他、副教材を使用したネパール人児童から「英語が書いてあるので分かりやすい（東京都）」、「教科書の順番に沿って書いてあるので見やすい（福岡市）」、「毎日みたい（京都府）」などの感想が聞かれた。

尚、今般作成した小学校3年生から5年生までの副教材は、幣団体の以下のホームページからダウンロードできるようにしている。

■副教材のダウンロード

<https://npo-sewa.com/%e3%83%80%e3%82%a6%e3%83%b3%e3%83%ad%e3%83%bc%e3%83%89/>

②セミナー開催による支援員の能力強化

(1) 第1回オンラインセミナー

本セミナーの終了時アンケートでは62.1%の参加者が「とてもよかった」、34.5%が「よかった」と回答していた。その理由として以下のような記述があった。

- 1, 単語帳などの情報をいただけたので。
- 2, ネパール人児童に対しての対応がよく分かったから
- 3, 普段は、日本語支援員を派遣する立場にいますが、その支援員の方々が実際に考えていらっしゃる、工夫されていることなどを具体的に伺えたからです。伺ったことを参考に、支援員をバックアップしていく体制も考えていけたらと思います。”
- 4, 指導者の方が、同じ教材を使って指導をされているのを見て安心したり、新しい情報を得ることができて良かったです。母語を活用した指導を開発していきたいので、副教材はともありがたいです。
- 5, 実際の学習支援をされている方や日本語教師の方のお話をお聞きし、自分自身が関わっている団体とネパール人コミュニティとの協働した今後の活動にとっても参考になりました。
- 6, 多種多様な場所で活躍されている方々の経験や意見を知ることができ、またその内容が非常にわかりやすかったです。まさに、今から実践できるヒントをいただきました。そして、普段の生活では知り合うことができないであろう方々と一方的ではありますが、繋がりをもてました。色々な手段で、日本に住まわれる外国籍の方々と関わることができることを知れました。自分の視野が広がりましたし、何か相談を受けた時などに、頼りにできる場所ができて、心強く感じております。

(2) 第2回オンラインセミナー

セミナーの終了時アンケートでは43.8%の参加者が「とてもよかった」、56.3%が「よかった」と回答していた。その理由として以下のような記述があった。

- 1, 実際のネパールの学校の様子を知ることができました。それが日本語支援に大きく役立つと思っています。支援をしていく中で、子供達の支援と同時に、受け入れている学校へのネパールについての理解も進めていく必要があると常々感じます。
- 2, 学校で活用できそうな、様々な資料や実践事例の紹介をしていただけたため。
- 3, ネパールのシュレスタさんのお話を聞いたことと、補助教材の情報があったので
- 4, 実際の状況を聞くことが出来たり、活用できるサイト等を教えて頂ける点が良かったです。
- 5, ネパールでの学校事情が分かり、インタビューの回答と合わせて、日本との違いを知ることができた。

(2) 第3回オンラインセミナー

セミナーの終了時アンケートでは76.9%の参加者が「とてもよかった」、26.9%が「よかった」と回答していた。その理由として以下のような記述があった。

- 1, 大前先生の報告の中で、生徒自身の言葉があって、とてもリアルでした。とにかく子ども達

の心はわからないままに進みがち。とても参考になりました。もちろん大前先生の高校でのカリキュラム等も具体的で、現場がイメージできました。

2, まさに今知りたいことを知ることができました。簡単なネパール語は来週から使います。SEWAさんの副教材も興味深いです。ご紹介ありがとうございます。また、大前先生から見せていただいた、動画はとても心に残るもので、転入してきたばかりの生徒が高校生になったときに同じくらい日本語が話せて、充実した生活を日本で送ってくれるといいな、と強く思いました。

3, ネパールに特化した色々な情報を得ることが出来たから

4, ネパール語を知れたので、子供達をネパール語で褒めてあげられる。少しでも知っている子どもとの距離が近くなると思います。

5, 参考になることがあった。がんばろうと思えた。

6, 京都の鳥羽高校定時制課程の様子について知ることができたから、またすぐに活用できそうなネパール語の表現も教えていただけたからです。

7, 小学生の指導をする上で、高校進学まで見通した指導の必要性を感じています。今回、高校での実践をお聞きできて、参考になりました。サヤミ先生のクラスルームネパール語講座はもう少し時間があればよかったです。

(3) 得られた教訓など：

本プロジェクトの実施期間を通じて、本プロジェクトにおける「価値」を考え続けてきた。本プロジェクトの経験や成果を踏まえ、本プロジェクトにおける「価値」は以下の3点にあると現在では考える。

1 点目は、学校教員や支援員などネパール人児童と日々接する人々に、副教材という具体的なソリューションを提供できたことである。今般のプロジェクトでは当初、「ネパール人児童」や「支援員」への裨益を想定していた。一方、オンラインセミナーを実施したところ、(当初の想定とは反し)「教員」や「日本語教師」の方々も多数参加していた。これらの人々は、ネパール人児童と接する人々の中で、問題意識を抱えており、具体的な解決策を求めていることの反映であると考えられる。このような人々の存在を浮き彫りにすることができたのは、本プロジェクトを実施できたからこそと考える。

2 点目は、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアOVの受け皿となったことである。

本プロジェクトには12名のメンバーが参画した。この内、11名は青年海外協力隊やシニア海外ボランティアのOVである。年齢も30代から70代まで、また地域も関東地方や関西地方、九州地方、台湾、ネパールなど様々な人々が集結した。

月に一度オンラインでミーティングを行い、作業はそれぞれが進める形で活動を前に進めた。特に現役世代のメンバーは、仕事や家事、育児などの負担があるにもかかわらず、ミーティングでは毎回数多くのメンバーが顔をそろえた。

ネパールで2年間を過ごし、日本に帰国後も「ネパールの為に何かしたい」と考えるOVは多い。本プロジェクトは、そのような人々の想いを受け止めるものであったとも考える。

3 点目は、幣団体の「ネパール・プロフェッショナル」としての立ち位置を明確に意識したことである。現在の日本において幣団体が社会の役に立つのは、ネパール経験者として「文化の翻訳者」となることである。言葉だけの翻訳であればGoogle翻訳などのテクノロジーで

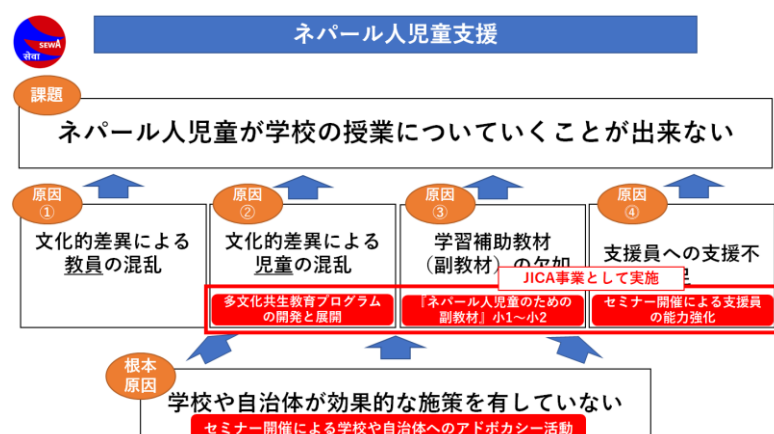
カバーすることができるが、ネパール人児童の学習支援では言葉だけではなく文化の違いを乗り越えることも重要である。副教材という言葉の壁を乗り越えることを意図した本プロジェクトを実施したことに伴い、その点に気がつくことができた。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

本プロジェクトの後継プロジェクトの為に、「2024 年度世界の人びとのための JICA 基金活用事業」へ応募し、採択された。本プロジェクトでは副教材を作成した他、オンラインセミナーにより学校教員や支援員に対し、その使用方法を案内した。

幣団体の活動のゴールは、ネパール人児童にとって効果的な学習環境を構築することである。この為、後継プロジェクト（来日直後の日本語がおぼつかない在日ネパール人児童に対する効果的な学習支援体制構築プロジェクト（フェーズ 2））では、以下の 3 つの活動を行う。

- ①小学校 1 年生および 2 年生の『ネパール人児童のための副教材』（算数）の作成
- ②多文化共生教育プログラムの開発
- ③セミナー開催による学校教員・支援員の能力強化



3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

本プロジェクトを通じて感じた経験やエピソードは以下の2点である。

1 つ目は、プロジェクト期間を通じてメンバー間で自由闊達な議論ができたことである。今般のプロジェクトには12名のメンバーが集ってくれたが、毎回の打合せには多くのメンバーが参加をし、「教科書から抽出する語」から「セミナーで何をするのか」まで侃々諤々の議論を行った。打ち合わせは毎回オンライン(ZOOM)で行ったので、対面での打ち合わせのように場の「雰囲気」を共有することに腐心した。また、それぞれのメンバーが仕事や家事、育児を抱えており、打合せは1時間以内で終わらせることを目指した。このような中、重要なトピックに関しては打ち合わせの参加者全員に発言を促すようにした。この他、(打ち合わせを)欠席した人でもキャッチアップできるように、打ち合わせの終了後には必ず「議事メモ」を作り、メンバー間で共有した。

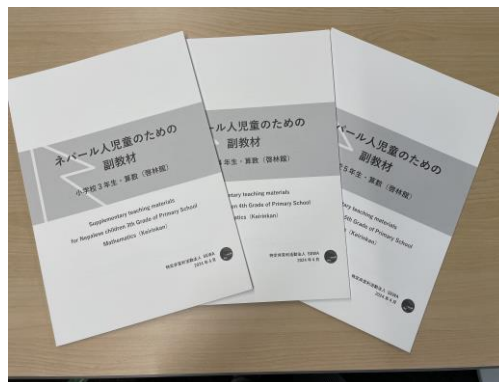
また、メンバー間の連絡はFacebookのグループ・メッセージャーを通じて行ったが、セミナー開催前などは各メンバーからの連絡事項が相次ぎ、確認が追い付かなくなるほどであった。これは、青年海外協力隊のOVが、帰国後も「ネパールにかかわりたい」という想いの強さの現れだと感じた。

2 つ目は、今般のプロジェクトを通じて「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」や「ベトナムフェスティバル福岡実行委員会」など、同じ分野で活動する他団体と知り合いになれたことも、本プロジェクトを実施してよかったことの一つである。自分たちで活動を行っている、とかく目の前の事柄に目を奪われがちである中、JICA九州から他団体の情報を頂けたことは、自分たちの視野を広げることに繋がった。

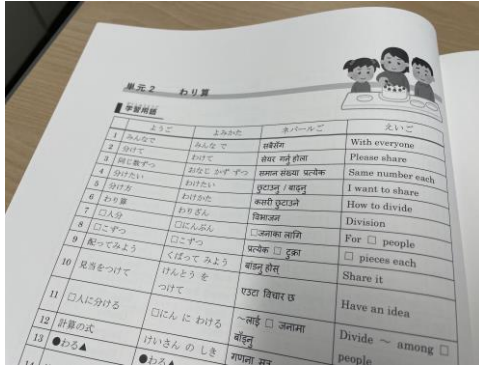
(2) 活動の写真



(副教材①)



(副教材②)



(副教材③)



(全3回のセミナーチラシ)

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

本プロジェクトを実施したことにより団体の成長につながったと思う点は、以下の2点である。

1つ目は、ネットワークが広がった点である。今般のプロジェクトを通じて各地の公的機関、教育機関のみならず、学校教員や日本語教師、支援員など、様々な機関や人々との知己を得ることができた。このことは今後、弊団体が活動を行っていく上で大きな財産であると考えられる。

2つ目は、伴走支援制度を活用したことにより、本プロジェクトのみならず弊団体の「価値」を考えることができた点である。上述の通り日本が多文化共生社会を目指す上で、弊団体は「ネパール・プロフェッショナル」として社会の役に立っていくという点を改めて認識することができた。このことは、今後の活動を行っていくうえで大きな指針となると考える。